

第十二回 新城薪能

とき 平成十三年八月十八日(土)
 午後五時三十分始
 新城文化会館大ホール
 入場無料

能組

連吟 玉 葛 清水利高 竹内省吾

太田研司 鈴木崇史 中嶋康夫
 今泉英三 森田收 太田康弘
 竹内三郎 土肥耕一郎 加藤貢
 牧野修

仕舞

岩船船 岩船船
 弁慶 弁慶 弁慶
 紅葉狩 紅葉狩 紅葉狩
 月宮殿 月宮殿 月宮殿
 鞍馬天狗 鞍馬天狗 鞍馬天狗

今泉尚美 松尾明海 中嶋瞳
 今泉友美 中川齊 村木岳史

6時10分頃

火入式

新城市議会議長
 新城市教育長

藤原眞治
 小林芳春

独鼓 羽衣

ナリ

栗谷浩之

後藤佳代子

連吟 玉 葛 永田聡子 星野弘子

土肥通子 杉山斐子
 辻田育代 水谷麻朱子
 鈴木富代 竹下京子
 金田夏代 加藤佳子
 小林寿枝 鈴木芳子
 荒川享子 今岡アイ子

ごあいさつ
 新城市長 山本芳央

舞囃子 草紙洗小町 中嶋 薫
 大鼓清水利高 苗今泉英三
 小鼓今岡ア子

あ ら す じ

狂言 膏 薬 煉 (こうやくねり)

膏薬煉の名人を自認している鎌倉の膏薬煉と都の膏薬煉が出会う。

まず二人は、自分の膏薬の系図を自慢しあう。つぎに薬種を比べあい、最後は吸い比べになり、お互いに膏薬を鼻につけて吸いあうが勝敗の結果は……

狂言 仁 王 (におう)

賭事で財産を無くした男が、日頃から目をかけて下さった方へ暇ごいに行く。

友人はふびんに思い、仁王になりすまして参詣人から賽物をだましとる計画をもちかける。

最初はうまく事が運んで賽物も多い。味をしめた仁王役の男は残ってつぎの参詣人を待つが……

能 小 鍛 冶 (こかじ)

一条の帝、或る夜不思議な夢で三条小鍛冶宗近に御剣を打たせよとの告げを受け、臣下の橘道成を宗近の私宅に遣わします。宗近は突然の宣旨に驚き、相槌を打つ者が無いのを理由に辞退しますが、帝の御霊夢によるものゆえ必ず作れとの重ねての宣旨に進退きわまり、この上はもはや神力を頼み申すほかに方法はないと、氏神の稻荷明神に祈るべく、身を清めて稻荷に参ります。

すると宗近の目前に一人の童子が姿を現して、御剣を打つてみよとすすめます。誰も知らないはずの宣旨を早くも知っていることさえおかしいのに、童子は数々の名剣奇譚や故事来歴をくわしく物語って宗近を鼓舞激励します。

宗近があやしんで名を問えば、汝はすみやかに帰宅して御剣を打つ支度をせよ、さすれば力添えしようと言ひ捨てて稻荷山の彼方へ消えて失せます。

やがて宗近が鍛冶場に弊帛を供え、一心不乱に祈っていると、さっきの童子が宗近の氏神である稻荷明神の姿となって現れ相槌を打ちに来てくれました。

百万の味方を得た宗近が喜びの槌をちようと打てば、稻荷明神もはったと打ち、ついに御剣を打ち上げ、表に小鍛冶宗近、裏に小狐丸と鮮やかに銘を入れ物使に捧げて明神は再び稻荷の峯に帰ります。

薪能（たきぎのう）

この名称は夜になって薪をたいて、それを照明がわりに演能するところから来た名称ではありません。もとは「薪の神事」などと称して新年に御薪を寺社に献進する儀式で、一種の春迎えの信仰行事でありました。それに伴って行われる猿樂が「薪の猿樂」でありました。奈良の「薪能」は奈良時代に起こった行事で、興福寺の修二会しゅにえに鎮守の社から東西金堂へ行法のために薪を積む儀式であり、その時翁式の聖者が薪を負うてまうことが芸能化しました。初めは寺に所属する呪師しゅしが司っていました。後、猿樂者が代行するようになりました。能樂が大成後は金春座が責任者となり、他の座も参勤していましたが、明治以降は中絶、戦後昭和二十一年復活、昭和二十五年京都薪能が平安神宮で催されて以来、各地で大衆野外能として流行するようになりました。

新城に於ては新城文化会館が完成したのを契機に、平成二年第一回新城薪能が新城市文化協会主催で催され大好評を得ました。富永神社の祭礼能とは別に、流派を問わず誰でも参加出来ることとなり、正に「能の里」を目指して参りたいと存じます。現在全国で二〇〇カ所程薪能が催されていますが、職分の先生方の演能がおおく、新城薪能は素人による演能であることが特徴であつて、今後永い伝統を持つ祭礼能と共に、薪能を新しい伝統として守り発展させて参りたいと存じて居ります。今後とも皆様方のご支援をお願い致します。

薪能の短歌・俳句を募集しております。あなたの作品を文化協会事務局へお寄せ下さい。

謡・仕舞・囃子（笛、小鼓、大鼓、太鼓）・狂言のお稽古をなさりたい方はお気軽に文化協会事務局へお申し込み下さい。それぞれの向きにお世話を致します。